

十一年ぶりの転勤

大学院研修二年間のうち休職扱いの一年が終わり、本務に復帰した。と同時に、板橋区にある都立北園高校定時制に異動になった。昨年の引越して前任校へは遠距離になってしまったので、一時間かかるとはいえ、私鉄一本で通える北園高校は、願ってもない転勤先である。

三校目の定時制高校。校長面接では、生徒が落ちついていて、勉強する雰囲気がかなりあると聞かされた。初仕事は、四月早々に行なわれる三次募集の入試準備だった。茶髪、日焼け肌でギンギンにおしゃれして願書を出しに来た女子を見て、すげえのが来たなと驚いている同僚がいた。それを聞いて私のほうが驚いた。定時制なら、あの程度の生徒は当たり前ではないか……。

私は前任者の後を受けて、新二年生の担任を持つことになった。男子七名、女子四名の進級者に、転編入の男子二名、留年の女子二名を入れて、十五名のクラスである。

生徒と対面する前から、ある一人を除いては、いいクラスですよと、複数の先生から聞かされた。その一人とは、二〇歳のSくん、中学以来問題行動が多く、本校でも入

学早々暴力事件を起こして長期の謹慎になった。ただし、その後はまじめに授業に出て、進級したという。それなら今はいいじゃないかと私などは思うが、どうも、一度貼ったレベルにこだわる人が多いようだ。

始業式で、担任の生徒たちと初めて顔を合わせた。小中学時代の恥ずかしいあだ名の話から始まる自己紹介は、必ず生徒の爆笑を買うので、私の十八番である。しかし、生徒たちはほとんど笑わない。少し笑いそうになっても、まわりの顔色を見て笑いを引ひめてしまう。こんな反応は初めてだった。

翌日から木、金と続く二日間は連絡と手続きばかりで、授業は始まらない。毎日がホームルームだったが、私は、怖気づいてしまつて、必要な連絡以外の雑談をする余裕も出ない。少し、歯車が狂い始めた。

次週から授業に出るクラスにも、予期不安を持つてしまう。初授業では、まず私の爆笑自己紹介で気分を和らげ、すかさず一人一人のスピーチに持ちこむ。前任校で長年成功してきたそのパターンに、自信がなくなつて来る。朝の瞑想中でも、どうしよう、と授業の不安が頭を離れなくなる。肩が凝る。

それでも、クラスの個人面談の予定を立てて、毎日二人くらいずつ話を聞いた。一対一で話す、素直な生徒ばかりだったが、問題のSくんは、順番の日に欠席した。先送りになったことで、かえつて彼と話すことへの不安も兆し始める。まだ何も始まつていないのに、

週末には、へとへとに疲れてしまった。

明けた月曜は入学式で、火曜から授業が始まる。生半可な瞑想では、この妄想は払いきれないと悟つて、入学式の日朝から家を出てサウナ行つた。サウナ室や浴槽で自律訓練法の暗示を繰り返すと、次第に深いリラックス感が全身を満たし始める。

目を閉じて浴槽の中にフローと浮かびながら、できる、できる」と唱える。やがて私の中に自信が戻つてくる。そうだよ、できるはずだ。腹の底から、そう言える気がした。

出勤した私は、面談の中で生徒の肯定的な気持ちを引き出すための質問項目を、吟味して作成した。それからSくんは電話をかけ、翌日の面談の約束を取りつけた。

翌日出た他の三クラスの授業は、実にスムーズだった。私のジョークに生徒たちは笑い、思いがけず生き生きとスピーチしてくれる。それで、私もますます元気が出てくる。私を癒してくれるのは、やはりこうした生徒たちの反応なのだと、今更のように感じた。

放課後、Sくんがやつて来た。はじめは構えているようだったが、私がどんどん肯定的に聞いていくと、口が回り始めた。最近では勉強のおもしろさもわかり出した。もう自覚があるから、まじめにやつている。それなのに、色眼鏡で見ると注意する教員には腹が立つ、と。延々三〇分しゃべつて帰つて行つた。彼は満足そうだったが、私のほうもまた一つ、生徒に癒されたと感じた時間だった。

早朝の散歩

夜間勤務の定時制教師は世を忍ぶ仮の姿で、実は私は、根つからの朝型人間である。高校時代は毎朝四時に起きて勉強していたし、大学生の時も、住込みの新聞配達員を二年間やつて、三時半に起きていた。現在、夜の学校に勤めていて眠くならないのは、仕事だという意識があるからである。そうでなければ、九時に寝て四時に起きるのが、自分の理想の生活パターンだと思っている。

だから、毎晩十一時近くに帰宅しても、十二時前後には寝て、六時に起きる。お茶を飲み、少し目が覚めたら、瞑想をし、七時になったら、隣に寝ている三歳の息子を起す。それが最近のパターンであった。

しかし、ある晩早めに帰宅すると、私たちの寝室のある二階から、疲れきった顔で母が降りてきて、「飛翔ちゃん(息子の名)、今ようやく寝たのよ」。そして、もう風呂に入るのもおつくだと、寝室に入ってしまった。

私が仕事に行っている間、息子の面倒は全面的に母が見ている。息子が最近なかなか寝つかないので、その間添い寝をする母の負担は大きい。保育園では昼寝をさせるのでも朝七時まで寝ると、睡眠が長すぎるのかもしれない。そう考えて、私と一緒に六時に起こしたりしたこともあったが、私が瞑想をしている間に、また眠ってしまうことが多く、なかなかうまく行かない。

私自身が朝型になったのは、幼時、同居し

ていた祖父に毎朝起こされて、犬の散歩に行く習慣があったからである。今同居している父は腰が悪く、それは期待できない。私が一緒に朝の散歩ができれば、息子のためにもいいのだが。そう漠然と考えながら、その晩は眠りに就いた。

翌朝、ふと目がさめて時計を見ると、五時である。なぜか、息子も目を開いた。私がすかさず「飛翔くん、散歩に行くか? いっぱいすべり台のある公園に行つて遊ぼうよ」と声を掛けると、「うん、いく」と、起きあがった。

駅の近くに珍しい遊具のいっぱいある公園があつて、休日にはたくさんの子供が遊んでいるが、いつも通りすぐりに見るだけで、寄つたことはない。朝の清澄な空気の中、私は後

ろに息子を乗せて、自転車をついだ。

人つ子一人いない早朝の公園は、私と息子のパラダイスだった。何種類もあるすべり台を次々と試して、息子は大はしやぎ。段々になつていく広い砂場も使い放題で、たつぷり二時間は遊んだ。その晩、息子があつという間に寝ついたのは、言うまでもない。

うまい起床のコツは、一度寝をしないことである。目が覚めたら、多少早くても起きてしまふ。息子を起すコツもそれなので、目覚めの兆しがあれば、「散歩に行こう」と言うので、息子はすぐに起きる。朝の散歩の習慣で、寝つきの問題は、あつという間に解消した。

問題は、私の大切な瞑想の時間を、どこで確保するかということだけである。

~~~~~瞑想の本棚から⑱~~~~~

### 松岡士祐『催眠—hypnosis—』小学館 一九〇〇円

にせ催眠術師の実相寺は、突然宇宙人が憑依したように叫び出す奇癖を持つ入絵由香と知り合い、彼女をチャネリングのできる占い師として売り出す。商売は成功するが、やがて彼女は多重人格症で治療が必要だと忠告する青年嵯峨敏也が現れる。彼は、東京カウンセリング心理センターの催眠療法科長であった。しかし、由香には、次々と謎が浮かび上がる。

嵯峨の謎解きを軸に、心理センターの部長倉石、カウンセラー朝比奈宏美の別々の物語も絡まるが、それぞれの問題は、催眠的な臨床技法を鍵にして、解決へと向かつていく。

心理学用語が銜学臭く飛び交うサイコ・ミステリーだが、読み進むにつれ、著者のまなざしの温かさがわかつてくる。催眠に対する偏見と誤解も、物語の中で自然に解かれていく。

心理学的な技法を真正面からテーマにしたこのような小説は、案外めずらしい。読み終えて、自分こそ、こういう小説が書きたかつたのに」と悔しがり、「いや、自分ならまた別のものが書けるぞ」と夢見る。私にとっては、久しぶりに創作の虫を疼かせる刺激的な本である。

~~~~~

能動的聞き方の力 1

相手の立場で徹底して話を聞き、「ふうん。そう言われて、きみも困ってしまったんだね」などと、理解した内容を相手にきちんとフィードバックする。Positive Listening は、C・ロジャースの非指示的カウンセリングの重要な手法のひとつであるが、私自身は、トマス・ゴードンの『親業』、『教師学』における能動的聞き方」としてそれを学んだ。その結果、私が受けてきた恩恵は、量り知れない。

現場で十年あまり、能動的聞き方を徹底して実行して来たが、こちらが真剣に聞くほど、思いもかけない解決策を生徒自身が見出していく姿に、何度も感動させられた。

能動的聞き方の根底にあるのは、相手の中に潜在している責任意識と問題解決能力への深い信頼である。彼が自分で解決せねばならない、彼自身の問題に対しては、余計な助言よりもまず、先入観を排して彼のことに耳を傾けて行く。その真摯で温かな援助に支えられて、やがて、彼は自分なりに問題を整理し、解決の道を見出していくのである。

留年して私のクラスに編入されたが、ほとんど登校しない男子生徒に、私はしばしば電話をかけたが、いつもつかまらなかった。

あるときまたま電話が通じて、話すことができた。彼は、仕事に専念するから、学校は辞める、と言った。ほとんど話したこともない私に警戒している様子で、それ以上踏み込んでほしくない態度であった。しかし、私は、それだけで彼との意思の疎通をあきらめる気にはならなかった。私は意識的に能動的聞き方を使い、彼の気持ちを汲みとって、フィードバックをくり返していった。

すると、突然彼の態度が変わりだした。仕事に専念するというのは、自分の不注意で起こした交通事故の賠償をしなければならなかったためであること、親にかなりの額を立て替えてもらっているのも心苦しく、昼夜働いて、少しでも多く稼ぎたいのだと語った。話の内容とは裏腹に、彼の声の調子は次第に明るくなった。迷っていた気持ちにも、踏ん切りがついたようだった。

その後、退学届を出しに来た彼は、終始にこやかに、「お世話になりました」と、深々と頭を下げて帰って行った。

教師にできることは限られている。その限界の中で、精一杯のことをしなければならぬ。だが、何か助言をすることが教師の務めだと、多くの教師が考え過ぎていないか。

ある女生徒は、自分が長年世話になった仕事先をやめて、転職しようかと迷い、私のアドバイスを求めに来た。ね、先生ならどう思う？ そのところを聞かせて欲しいんだ」と、しきりに言う彼女に対して、私は、彼女

自身の気持ちを話すことを求め、矛盾していることも揺れていることも、すべてありのまま受けとめて、返していった。私の聞くところでは、彼女は新しい職場に魅力を感じながらも、現在の職場には不満半分、強い愛着を持っているように感じられた。結局は今の職場をやめたくないのだろう。

しばらく話して、それでもアドバイスをと懇願する彼女に、「もうきみは自分で結論を出していると思うけどなあ」と言うと、「いや、私がどつちに決めていると先生は思うの？」。私は思わず、「やっぱりきみは、今の職場を辞めたくないんじゃないのかな」と、自分の考えを口にした。すると、彼女は「うん、わかった」と満足そうにうなずいて帰っていった。

数日後、彼女は「やっぱり、今の仕事やめて、新しいところに行くことにしたから」と、さばさばした調子で報告した。結局、彼女は私の発言とは関係なく、自分で考え、自分で決めたのだ。あれほどにアドバイスをしてもらいたがった生徒にしてこうなのである。

もつとも、これには後日談があつて、数カ月後、彼女はまた元の職場に戻つたと言いに来た。私の読みは、確かにまちがってはなかった。しかし、自分の本心に合った結論を受け容れるために、彼女はいつたん、別の道をとる必要があつたのであろう。そういう心の変化の道筋は、彼女が自分で手探りしながらたどっていくものであつて、他者である教師に口出していることではないのである。

「学者を日北相すよりも…」

七月に、北海道教育大学函館校で教育心理学会総会があり、現在の研究の一部を発表してきた。初めて参加する大規模な学会だった。今まで文献でしか知らなかった著名な先生方の実物を拝むことができ、発表に関連して何人かの新たな知り合いもできた。日本で教育心理学に携わる主だった人々が集まったのだと考えると、この世界は、広いとも言えるし、案外狭いとも感じてしまう。

八月には、筑波大学の茗荷谷校舎で日本読書学会総会があった。こちらは小さな学会だが、国語学と心理学にまたがった学際的な学会で、学会誌『読書科学』の論文には、私の参考文献として重要なものが多い。

大学院に入り、学者の世界を垣間見るようになって、この世界の生存競争というものも、多少は見えてきた。ここでは、論文を書いて権威ある学術雑誌に載せる、ということが何より重要であるようだ。それにプラス、人脈が絡んでくる。

博士課程に進学して、大学教員を目指す人が身の回りにも何人かいるが、女性が多い。その中の一人が、私にも学術論文を書き続けるよう、熱心に勧めてくれる。彼女自身、数年勤めた高校教員を辞めて心理学の道を選んだ。現在は博士課程に進んでいるが、年齢的にはぎりぎりのところで、後には退けずがんばっている。そんな立場から、私の将来も案じてくれるのだろう。先日、「自分

の仕事をもっと広げていく地位を目指してほしい。そういう年齢ですよ」と言われた。

確かに、ここ数年は大学院を目標にイメージし続けてきたが、それが実現してしまうと、その先の将来像はあいまいである。いつまでも若い気であるが、四〇歳になった。教員派遣の仲間で私と同年の小学校教員T氏が、教頭試験を受けるべきかという悩みを折に触れて吐露するのを、他人事のように聞いていた私だが、そういう年齢には違いない。

二〇代から三〇代にかけて、どう生きべきかという点では、ずいぶん考えた。私は、何かを作ることが好きである。それが一番熱中できて、人の役に立てばうれしい。だから、人が学習の場面で、できないことをでき

るようになって、自分の可能性に目覚めていく、そのために役立つ方法や道具を、工夫して作り出す。それが私のやりたいことである。その実感は、二十年、揺らいでいない。

心理学の研究は、その第一目的に役立つ限りにおいて意味があるので、研究者になりたいとは思わない。始めた以上、長いインタビューで論文を書き続けて行こうと思つているが、学界で認められることにエネルギーを注ぎ、本当にやりたい仕事が後回しになったら、一生の悔いである。

必要なのは、やりたい仕事を実現している自分の具体的なイメージである。修士論文に取り組みながら、将来像をじっくり考え、鮮明に描き出したいと思つている。

~~~~~ 瞑想の本棚から ⑬ ~~~~~

▶トマス・ゴードン著 『親業』 (近藤千恵訳) 小学館 一五五〇円 ▲

▶トマス・ゴードン著 『教師学』 (興沢・市川・近藤訳) 小学館 三〇〇〇円 ▲

親と子の関係づくりの方法を説く『親業(Parents' Effectiveness Training P.E.T.)』、教師と生徒の効果的な関わり方を示す『教師学(Teachers' Effectiveness Training T.E.T.)』は、ロジャースの流れを汲むトマス・ゴードンが開発したトレーニング体系で、日本では、訳者の近藤千恵が親業訓練協会を設立し、研修会などを主催してその普及に努めている。

『能動的聞き方』と併せて、親が自分の感情や考えを自分の責任の取れる言い方で伝える『私メッセージ』、相手の罪を責めたり解決策を押しつけ合うのではなく、問題を共通の課題としてとらえ、協同して解決策を模索して行うという『勝負なし法』。以上三つの柱でできた関係作りの具体的な対話法は、カウンセリングの考え方を内部に含みながら、対等で相互成長的な親子(教師生徒)関係を築くことを目的としている。誰の人生の問題なのか、考えねばならない人は誰なのかを明確にする、『問題所有』の考え方もわかりやすい。

~~~~~

能動的聞き方の力 2

新採の定時制で担任の生徒たちとの関係が悪化し、追い詰められていたとき、先輩の先生に勧められた本が親業であった。

新採校での問題は根本解決できなかったが、自律訓練法による瞑想と、KJ法による自己省察を経て、私は自他への信頼を回復することができた。そして心機一転、元気に転勤先に赴いた私にとって、親業から学んだ方法は、生徒たちと真正面から関わっていくための有力なカードとなった。

まもなく、親業の教師版、教師学が刊行された。夏休みに四日間の教師学講座があると知り、すぐさま参加を申し込んだ。

講師は、親業・教師学訳者の近藤千恵先生である。少女のような瞳と、信念に満ちた行動家の雰囲気をもつ、魅力的な女性であった。全国から集まった二〇人あまりの参加者たちは、相互に関係を深めながら、各自の気づきを通して教師学の方法と考え方を学んでいく。

その中で、私は忘れられない体験をした。私が高校生役となり、教師役の相手と話し合うロールプレイだった。カードに設定が書かれている。授業妨害をする生徒。しかし、勉

強嫌いではなく、好きな分野に熱中する気持ちが強すぎるあまり、しつこく質問をしたり、不勉強な生徒の揚げ足を取ったりしてしまふ。教科担当の教師は彼を呼び、「能動的聞き方」を使って彼の気持ちを受容しつつ、問題が生じていることも伝えて、解決の道をいつしよに考えようと提案する。

対話が進むうち、私は突然、割り当てられた役が高校時代の自分そのものであるという感じにとらえられた。いや、むしろイコールではない。しかし、……。

高一のとき、生徒たちが分担個所を調べてきてレポートする授業で、私は毎回、級友の発表にいちいち揚げ足を取るような質問をし続けた。やればやるほど浮き上がっていく。そうわかつていながら、やめることができなかった。あれは、いったい何だったのか……。

あるいは、高三の受験時代、私ほど本気で受験勉強に取り組む者は、周囲にいなかった。私は、級友たちを内心見下しながら、何かしらに駆られるように、机に向かい続けた。そんな自分がいやで仕方がないのに、卑小な優越感だけが、当時の私を支えていた……。

ロールプレイの役を演じる私の現身に、高校時代の自分が憑依したようだった。気がつくと、当時の混沌とした内なる葛藤を、整理がつかないなりに、精一杯話そうとする自分がそこにいた。この上もなく素直な、ありのままの自分であるという実感が、私を満たしていた。

問題そのものは、解決するかどうかかわからない。しかし、私の話を熱心に聞き、一緒に解決の道を探ろうとしてくれる教師を前にして、「この先生がいてくれるから、私は人生を信じられる」という思いがこみ上げてきた。思わず涙があふれ、私の中で何かが溶けて、浄化されていく感じがした。

事後の話し合いで私とその経験を報告すると、近藤先生は「過去をもう一度生き直す、ということがあるんですね」と言い、特別に、参加者全員の感想を求めた。相手役だった中堅の男性教師も、「私にとつても、とても幸せな時間でした」と言ってくれた。

翌朝、会場に一番で到着した私は、広い畳敷きの部屋に誰もいないのを幸い、瞑想の姿勢をとり、イメージの中で、昨日の体験をたどり直した。途中で近藤先生が部屋に入ってきて来られたのがわかったが、私は瞑想を続けた。数分して目をあげ、先生にあいさつした。

瞑想のおじやまをしてはいけないと思いついて先生は言われた。私は「昨日の体験のことを思い出していたんです」。すると、先生は、「私の目を見て深くうなずき、どうでも、おおきな体験だったんですね」と言われた。私は「はい」と答えた。それだけで、もうことばはいらなかった。近藤先生の的確な能動的聞き方は、私を完全に満ち足りた気持ちにさせた。

この体験が私に、徹底して「能動的聞き方」を使うことを決心させたのだった。

私流？ 論文の書き方

大学時代の卒論は、文芸科という怪しげな専攻ゆえ自作の小説作品^①で済んだ。だから、現在執筆中の修士論文は、私にとってまともな論文を書く初めての体験である。

自分の考えを自由に書くのは得意だが、論文の場合、先行研究を踏まえて論を展開しなければならない。先行研究のまとめを私がどう行なったか、試行錯誤で編み出した方法をご紹介します。ただし、明らかに邪道と思われるので、指導教官には内緒である。

まず、収集した文献のデータはパソコンのデータ・ベースで整理する。画面を一枚一枚の文献カード形式にして、必要項目をすべて入れ、内容を書くメモ欄を広くとる。そこに文献の要約や引用したい個所の抜き書き、自分の考えなどを随時書きこんでおく。

日本語の文献はそれでいいのだが、問題は英語の文献である。英語文献は、たいてい日本語論文に引用されたものを使う。だから、引用者がその文献を要約している部分をそのままデータ・ベースに書き写しておく。しょせんそれは部分的な内容でしかないのだが、やむを得ない。複数の論文に引用されているものは、いくつかの要約がたまってきて、全体像がおぼろげながら見えてくる。

もちろん、その英語論文の本文は図書館で入手しておく。しかし、冒頭のサマリーを読めばいい方で、実際にはほとんど読まない。けつきよく、データ・ベースに書きこまれた孫引

き要約がその文献のすべてとなる。邪道というのはここである。ここまで暴露すると、どこかからお叱りを受けそうな気がするが。

さて、そうしてできたデータ・ベースから、論文に使えるようなデータを抜き出す。私の場合は、以前紹介した「インスピレーション」というアウトライン・ソフトの箇条書き画面に入れる。箇条書きを階層的にまとめる作業が手軽にできて見やすいので、適当に考えを書きこんだりしながら、前後を入れかえ、グルーピングして表題をつけたりする作業をしていく。この作業は長期にわたり、少しずつやっていく。その間にまた新しい文献が見つかり、データ・ベースに入れ、インスピレーションに書き出すということをくり返す。

このまとめの作業では、KJ法で培ったセンスが大いに役立った。箇条書きをくり返し読み、似た発想のものを少しずつまとめていく。大学では卒論を書かなかったが、その後KJ法狂いの一時期を持ったことが、私の論理的思考力を鍛えてくれたと思っている。

そのようなまとめ作業を根気よく続けるうち、先行研究のまとめは、自然とできてしまった。文献の孫引きも、適当に修正が加えられもするが、文脈に溶け込んで違和感がない。よくありがちな、引用に引きずられて論旨がそれるようなこともなく、自分でも不思議なほど、自然に論が流れていく。

もつとも、専門家が見れば、邪道の手はお見通しかもしれないが……。

~~~~~ 瞑想の本棚から ⑩ ~~~~~

### ▶ 鹿内信善 『創造的読みへの手引き』 勁草書房 二六三円 ◀

副題 詩の授業理論。難解でよくわからないと言われる現代詩の読解指導に、フォーカシング(本棚⑩参照)の技法を応用したユニークな方法論を提案する。詩を読みながら、自分の内部に起こってくる身体感覚や漠然とした感情(フェルトセンス)をありのまま味わい、慎重にことばを探していく過程で、詩の意味を直観的に理解し、自分なりの首尾一貫した解釈を見出していく。実際、大学生にその方法を試みて、現代詩がよくわかる、好きになるなどの効果を得、小学校での実践例も紹介している。フェルトセンスとイメージはイコールではないがこの方法論は、私がかつて教育催眠学会で実践報告した「詩のイメージ読み」と類似し、カット・イメージ読解法<sup>②</sup>の発想にも通ずる。著者は教育心理学の研究者であるが、単なる事象の分析に終わらず、このような新しい教授法を提案するのは、学者の中では稀有な例である。心理学は具体的な方法論の開発にこそ貢献すべきだと考える私にとって、今回修士論文のために収集した文献の中で、もつとも共感を覚えた一冊。

~~~~~

私流教師のセルフ・コントロール 21

都立北園高校定時制 山崎茂雄

能動的聞き方の力 3

能動的聞き方が有効なのは、いままで述べたような一対一で静かに話を聞く場面ばかりではない。私が最初の学校で経験したように、学校現場で教師は、しばしば生徒の暴力や脅しに直面せざるを得ないが、そうした場面でも能動的聞き方は大きな力になると痛感した事件がある。

いったん退学したにも関わらず、友だちを頼って毎日のよう学校に出没しては授業や行事のじやまをする、という元生徒がいて、困ったことがある。しかも、彼はシンナーを常用していて、予測できない行動をとる危険があり、他の生徒にシンナーを勧めているらしい様子も見られた。職員会議では、警察とも連絡をとりつつ、エスカレートするようなら、臨時職員会議の決定を経て警察に通報することも考えよう、との合意になっていた。

しかし、ある日、例の元生徒が校内で暴れているとして、教頭が独自の判断で警察に通報し、元生徒はやってきた警官に連行されてしまった。緊急に職員会議が開かれ、教頭の判断の是非と、今後の対応について、話し合いが始まった。

その話し合いの最中に、廊下で大きな怒鳴

り声がして、職員室の戸が荒々しく開かれ、二人の男子生徒がものすごい形相で入ってきた。連行された元生徒の友人で、友だちが警察に逮捕されたことを知って、大声で学校側のやり方を非難していた。

「ごんだけ教師が雁首そろえているくせに、何で警察を呼んだんだ。仮にも元生徒だろう。教師が自分たちで何とかすればいいじゃないか。それがお前らの仕事だろ」そう怒鳴りながら、あつと言う間に教頭に詰め寄った。

「何で警察を呼んだんだ」と問う彼らに、教頭は虚勢を張るように学校の秩序を維持するためだ。私にはその責任がある。警察呼ぶことが責任かよ。どうして自分たちで何とかしないんだ」と、生徒たちは声を荒げる。

教師たちは、彼らと教頭を取り囲むようにして見守り、何人かの教師が「〇〇、落ちつけ」などと声をかけるが、生徒の興奮はいつにも治まらない。担任教師が「やめなさい」と言いながら生徒の肩を押さえて引っぱろうとするが、実力行使は却って火に油を注ぎ、彼らはますます大声をあげた。

私は事態を見守りながら、彼らのことばを自分の中で反芻していた。彼らの言い分は、身勝手さはあるけれども、彼らなりに筋が通っていると思われた。私は彼らに近づき、低く大きな声で、君たちの言いたいことはわかったぞ。これだけ教師がそろっているのに、何で警察を呼んだんだと、そう言いたいんだな。俺たち教師がどうして自分たちの力で解決し

なかつたのかと、そう言いたいんだな。そう、ゆつくりと言った。

彼らは振り向いて、私を見た。しばしの沈黙の後、一人が「そうだよ」と静かに答えた。彼らの体から、急に力が抜けたように見えた。そうなんだな。君たちの友だちを思う気持ちはわかったからな。これからどうしたらいいかは、今みんな話合っているところだ。あいつのために悪いようにはしないから、今日のところは、帰りなさい。私がそう言うのと、彼らはおとなしく教頭のそばを離れ、担任に付き添われて職員室を出ていった。

このできごとについて、後であいつら、案外あつけなかつたな」などと言う教師もいた。何を見ているのだろうと、私はがっかりしたが、正しい対応をすればあつけなく解決する問題を、こじらせてしまうことがいかに多いかというところでもある。

二回にわたって、能動的聞き方の成功例を述べてきたが、そうそううまく行かないのがむしろ常であるのは、言うまでもない。しかし、いくつかの成功体験は、私の中に、生徒の自己解決能力を信ずる気持ちを育ててくれた。その基本的信念を胸に、あの手この手で生徒と関わっているというのが、実情である。

M・エリクソンのエピソード(本棚参照)を読むと、人の自己成長能力を呼び覚ますには、実に多様な手があるのだ感心する。というより、そのような自在な対応ができる自分になりたいと、切望せずにはいられない。

私流 教師のセルフ・ヒントロール 22

都立北園高校定時制 山崎茂雄

人を笑わせる技術

先日、新聞で「教師のためのお笑い実践セミナー」が開かれるという記事を見た。教室にお笑いを！ キレル子どもはお笑いで救える！」と副題にある。若手お笑い芸人を育てているお笑い評論家が、教師のためにお笑いの指導をしてくれると言う。「これは！」と思い、さっそく参加を申し込んだ。

私は、いつも冗談を言っているようなひょうきんタイプの教師ではないが、授業では生徒を笑わせる必要があると、いつも思っている。生徒は、教室の中でリラックスしてありのままの自分であるときにだけ、自ら学ぶ意欲を持ち、学習が成果を上げる、というのが私の基本的信念である。そのために私はいつも、明るくオープンで、あたたかい雰囲気心がける。それでも、なかなか場の緊張がほぐれないとき、あるいは、学習に注意が向いていかないとき、うまい笑いの爆弾を落とすことができれば、一気にリラックスがひろがり、生徒は期待と集中のまなざしになる。

しかし、いざ笑わせようと思うと、それはあんがい難しい。小中学時代の恥ずかしいあだ名を暴露する十八番の自己紹介をはじめ、いくつか、生徒を笑わすネタはあるが、持ち

札は多くない。私がむしろ得意とするのは、生徒にいろいろな発言をさせ、それを受けとめ、ときにはつこみやフォローを入れて笑わせたりしながら、さらに発言を引き出していくことである。うまく盛り上がっていくと、生徒たちの中に隠れていた乗りが出てきて、誰かの言った一言に、どと笑いが起こる。

生徒のスピーチや話し合いで構成する話し方」の授業で、長年そういう実践をしてきたが、「生徒を笑わせる技術」という意味では、自分のやり方に満足しているわけではない。いつでもどこでもしやれた小話で生徒をどつとわかせ、手中に引き込む。そんな話術への、漠然としたあこがれが心の片隅にある。だから、「お笑い実践セミナー」の名前にひかれたのだと思う。

セミナーが開かれたのは、授業のある土曜日の午後。多くの教師は仕事を終えてから来るのだろうが、夜が授業の私は、このために休暇を取った。郡内のあるホールのリハーサル室。参加者は二〇人ほどだが、話題性のある会なので、複数のテレビ局が取材に来ている。私もさっそくインタビューを受けた。

登場した講師西条昇氏は三〇代、大柄で眉ともみ上げが異様に太く、マンガから抜け出てきたような印象を受ける。さっそくドリフ風の「オイツ」というあいさつで笑いを取るが、その後の話は、いたってまじめである。

冒頭から、「笑いは哲学である」と来た。たとえば、植木等の「わかつちやいるけどやめら

れない」は、人間の本質を深く突いている。お笑いは、誰もがあたり前と思っていることに、「どうして？」と疑問を持つことから生まれる。そこに、ものごとを深く見つめるヒントがある。あるいは、つらい時でも、お笑いでそんな自分を突き放し、相対化できる。そこに、余裕が生まれる。また、お笑いは、最高のコミュニケーション技術「だとも。笑わせる芸は、場の空気を読み、適切なもの言いを考えて、流れを作り上げていく、優れた社会的技術である。そこで彼は、「お笑い」を自己表現のための芸術科目として設けることを提言する。新指導要領では、学校独自の教科を設置することが可能になるから、と。

そんな前置きから、講義は実践編に移る。芸人を目ざす小中高生の男の子女の子が八人ほど登場。西条氏の質問に、次々と思つたことを自由に答えていく。これは、かつてジャニーズ事務所の社長が、タレントの卵たちを鍛えるためにくり返し行なっていた訓練だという。たとえば、「この世でいちばん好きなものは？」、「オリンピックに入れたい競技は？」…。ためらわず発言する勇気と、反射的におもしろいことを言う神経が養われる。こうしたゲームを教室で日常的にくり返せば、生徒も発言することのおもしろさを知っていくのではないかと、西条氏は提案する。

次は、会場の教師たちに質問が飛ぶ。たとえば、「宝くじで一億円当たつたら、まず何をかう？」。出てくる答は、「家」、「旅行」、

私流教師のメン・コントロール ②③

都立北園高校定時制 山崎茂雄

映画『催眠』をめぐって

映画『催眠』(東宝 落合正幸監督)が封切られた。瞑想の本棚から②で紹介した、松岡圭祐の小説『催眠』の映画化である。

原作は、多重人格障害と見られる女性の謎を軸として、臨床心理の専門家たちが活躍するサイコミステリー。血が一滴も流れないのに、実に手に汗握る展開で、臨床心理学の知見が随所に開陳され、読者が『催眠術』に対して抱く誤解と偏見も、次第に解かれていく構成になっている。サスペンスでありながら、臨床心理士松岡圭祐のクライアントに注ぐ眼差しの温かさが伝わってくるような、たいへん読後感の良い小説である。

さて、映画では、あの小説をどう料理したのだろうか。原作そのままでは、映画としては地味かもしれない。娯楽性を高めるための誇張や脚色は避けられないにせよ、原作のメッセージは正しく伝えてほしいものだと思うながら、映画館に向かった。『催眠』が心の悪魔をえぐり出すこの映画は見終わつた後のあなたを保証しない……などという宣伝コピーに一抹の不安を覚えつつも……。

観客は、主演の稲垣吾郎のファンとおぼしき若い女性や、カップルが多い。しかし、映画

が始まると、私はしばしば眉をひそめ、何度も目を背けたくなった。それは単に人物設定を借りただけで、原作とは似ても似つかぬグロアスなホラー映画であった。

つけから、凄惨な自殺の場面が続く。奇怪な連続変死事件の謎を追う刑事は、稲垣扮する催眠臨床家の協力を求める。そして明らかになってくる真相は、何と『催眠暗示』による自殺だというのである。

『催眠暗示』とは、催眠中に決められたキ―刺激(例えば指を鳴らす、何かを見せるなど)によって、特定の行動をとるよう暗示されると、覚醒後でもその通りに行動する現象をいう。しかし、害のない行動だからできることで、意に反した行動はとらないし、自殺や殺人をすることはありえない。

そのことは、映画の中でも、臨床家の口から何度もくり返される。にもかかわらず、自殺は次々と起きてしまう。被害者たちは、心の奥底に秘めた心の傷(とくに罪の記憶)に働きかける暗示によって、自罰的衝動が高まり、その結果、自殺に至る。昔、子どもが溺れるのを助けられなかった悔いを持つ老人は、突然、数十年前の事故の瞬間を思い出し、子の名を呼んで飛び降りる。主要人物の刑事も、友達を裏切つた幼い日の罪の意識から、評してくれ」と涙を流してピストル自殺するのである。そうして次々と犠牲者が増え、何の救いもなく、結末を迎える。

実に不愉快な映画だった。

『催眠暗示』によって仕掛けられた自罰衝動による自殺は、心理学的には笑止千万だが、それよりも私は、このような物語を考える者の人間観に、強い嫌悪を感じる。おそらく誰でも心の奥底に、取り返しのつかない罪の記憶はある。それを背負つて、人はどう生きて行くのか。そこにこそ、人間の苦悩の意味があるはずなのに、そうした罪の記憶をいじられ、自殺する――。人間の心理を、おもちゃにしているとしか思えない。

重いトラウマを抱えながら、回復の道を懸命に探す人たちの苦しみや、それを援助しようとする臨床家たちの努力など、この映画の作者は、まったく眼中にない。ましてや、自分の映画が世の中に及ぼす悪影響について、何の責任も感じていない。これでは、小説『催眠』で、催眠療法への誤解を解こうとした松岡氏の意図も台無しである。彼は、どうしてこのような映画化を許したのであろう。

パンフレットによれば、松岡氏は、落合監督とずいぶん話し合い、催眠の実演も行なつて、催眠への正しい理解を促す努力を充分にした。その上で、ホラー映画にしたいという監督の意向を受け容れたという。松岡氏は、非難がましいことは一言も言っていないが、監督がずいぶん強硬であつたことが伺える。けつきよく松岡氏は、押し切られたのであろう。それなら、原作の使用を許可しない」と交渉の席を蹴るのは簡単なようだが、大人の世界ではそうそうできることではない。

私流教師のモル・クトロル ②4

都立北園高校定時制 山崎茂雄

何ゆえに彼らは……

担任クラスのS君が亡くなった。顔見知りの少年とのトラブルで刺される、という突然の事件だった。

憶えておいでだろうか。北園高校に転任早々、会う前から問題生徒だとさんざん聞かされ、私のストレスを大いに高めたが、私が前向きに面談に望んだら、心を開いて実に楽しげに話してくれた、あのSくんである(連載⑩参照)。あれからも私との関係は良好で、彼自身まじめに授業に取り組み、あと一年あまりで卒業、という矢先だった。

私にとつても、級友たちにとつても、彼はクラスの中で格別な存在だった。それが、いかに多くの人にとつてもそうであつたのか。告別式で、それを痛感する光景を目にした。式場の周りには、焼香を終え、出棺を待つ数十人の若い男女が、寒風の中、一様に頭を垂れて立ち尽くしていた。若者の数はどんどん増えていき、止まることがないように見えた。それは、何の義理も打算もなく、単に個人としてS君を慕い、その死を悲しんで集まったたくさんの友人たちだったのだ。その群像こそ、彼が二十二年の人生をどう生きたかを、はつきりと物語っていた。

教員生活十七年の中で、自分が直接に教えた生徒を喪うのは、実にこれが八人目である。信じ難いかもしれないが、そのうち四人が、私の担任した生徒だった。

先天性の心臓疾患を持つO君は、友達にも恵まれ、体力のハンデと闘いながら二年まで修了した。歌詞を書くのが好きでよく見せに来ていたので、三年のクラス替えで私のクラスになったときは、私自身も嬉しかった。しかし、一日も登校できないまま、四月のうちに亡くなった。遺稿となつた僕にはさようならが言えませんでした。始まる手紙を読むと、彼が遠からぬ自分の死といつても向き合ひながら、精一杯生きようとしていたことがわかる。

卒業まで四年間担任した女子さんは、重い糖尿病で亡くなった。卒業して一年。成人式を終えたばかりだった。あとから考えてみると、初任校で挫折を体験した私が心機一転前向きに取り組もうと大森高校に赴任し、さつそく担任した新一年のクラスの中で、最初に対面したのが彼女だった。入試の成績がトップだったので、新入生代表のこぼを述べてもらうため事前に呼んだのだ。私の新しい生徒だという感慨で、そのときの印象は強く残っている。あ那时的彼女は、その後の彼女よりもずっとふつくらしていた。いつからか彼女は痩せて、顔色も悪くなつていった。ときに無気力に見えたのは、体調から来ていたのだろう。四年のときにはとくに疲れを訴えて一時入院もし、出席がぎりぎりだったが、友達

に励まされて卒業までこぎつけたのだつた。

あの学年は、私にとつてはまさに永遠の生徒である。彼らの卒業のとき、私は、自分が精一杯に関わつた生徒たちが一人一人さまざまな形で成長し、巣立っていくのを見ると、教職の醍醐味を、しみじみと感じたものだ。それだけにE子さんの死は、信じがたくつらいできごとだった。

H君の兄から、彼が自ら命を絶つたという知らせを受けたのは、北園高校に赴任してからのことだ。大森高校で私が二度目に卒業させた学年の生徒である。同級生の一人に連絡すると、すぐに仲間全員に電話を回してくれて、成長した彼らと通夜の席で再会という仕儀となつた。彼らもまた、私にとつての第一の永遠の生徒たちである。四年間、文化祭のクラス演劇に熱中した。そんなとき、ふだんは斜に構えて級友から距離を置くH君が、放課後の大道具づくりに、そつと加わつて手伝っている。彼なりにクラスの中に居心地は悪くないのだらうと思つたものだ。

担任ではなかつたが、生徒会役員としてがんばつてくれたM子さんの死は、本当に悲しい知らせだった。生徒会顧問の私は、一人の教員と一緒に毎夏、役員生徒たちを連れて、山中湖畔へ合宿に行つてた。ある年の合宿の夜、ハイになつたM子さんのおしやべりに、延々つき合つたことがあつた。彼女の周囲の大人たちがいかに定時制を差別して見ているか、でも自分は定時制に来てどんなに幸せか、そ

して自分は、差別され弱い立場にある人たちのためにこそ働きたいのだと、そう彼女はくり返しくり返し語るのであった。まじめで優等生ふうだった彼女にもおそらく秘めたつらい体験があり、それだからこそ、それを前向きに乗り越えて、人のために尽くす生き方をしたいと願っていたのだろう。しかし、彼女のその夢は、信号を無視して暴走してきた車にあえなく踏みじられてしまったのだ。

他には、十五歳で地方から出てきて一人暮らしをしていたが、都会の華やかさに振り回されて、鉄道に身を投じるまで自分を追い詰めてしまった区くん。

前の学校で進級できずに転校してきて、大森高校でも進級できないまま転校していたTくんは、口が悪く、誰にでも挑発的なもの言いをしていた。おそらくはその口が災いしたのだろう。車の追い越しトラブルで因縁をつけた相手に、逆に刺されて命を落とした。

そして、初任の工業高校で教えた電気科のAくん。勉強は嫌いだつたが、毎日ニコニコして、学校生活そのものは楽しくてならないふうだった。大森高校に転勤して数年後、彼の同級生と偶然電車の中で出会い、Aくんが仕事上の事故で亡くなったことを聞いた。

肉親ならぬ身の無責任で日頃は忘れているが、こうして書きつらねていると、その悲報に接したときの無念さがまたよみがえってくる。彼らは、何ゆえにそこで死なねばならなかったのか。

教師の仕事は、大きな成長点にある生徒たちと関わり、その成長を援助し、やがて巣立つていくのを見送る。そのとき、我知らず夢見る。彼らがこの時期の経験を糧にして、たくましく生き、この世の中で何がしかのよきものを創り出してくれることを。しかし、生徒の死は、教師のその能天気な夢を、突然にして断ち切ってしまう。

しかし、教師はまだしもいい。私も一人の親として、子に先立たれた親御さんの苦しみを、想像するに余りある。親の愛は見返りを期待しないが、それは、子が成長し、自分なりの人生を生きていつてくれるという漠然とした望みがあればこそである。そのささやかな夢すら見ることを許されないとしたら、その子

を授かったことの意味はどこにあるのか。

思えば私は、若いころ、自殺こそ思わないが、自分の命を争いぶんと軽く扱っていた。産み育ててくれた親を思うことなど、どれほどあつたらう。しかし、今の私は子の親となり、老いた両親の傍らにいて、今はまだ死ねない、生きつづけねばならないと切実に思う。

生きることの意味は、一人では見つからない。人が互いに関わりを結び、つながることの中に、その意味はおのずと生まれてくる。

しかし、深くつながり、愛するほどに、死の別れが私たちを苦しめるとすれば、そのことを私たちはどう受けとめたらよいのか。

そんなことを考えているとき、一冊の本と出会った。それを本棚で紹介しよう。

~~~~~ 瞑想の本棚から ~~~~~

### ▼ 『飯田史彦 生きがいの創造』 P H P 文庫 六六六号 ▼

経営学の助教授である著者は、経営を根本で支える「生きがい」を論ずる立場から、臨死体験や「前世」への退行催眠などの科学研究を集めて、「生まれ変わり」のしくみを科学的知識として示そうとする。我々は、成長をめざしてくり返し転生し、人生の課題に込めていく意識体(魂)であり、悲運や苦難と見えるものもすべて、問われている試練である。しかも、自分がどこに生まれ、どんな課題を負うかは、指導的な意識体の助言を受けつつ自分自身の手で計画されるという。そして、つながりの深い意識体同士は、別の人生でも家族や友人としてくり返し出会う。

やり直しがきかないからこそ、今を生きる意味があると考える私は、オカルト的な復活談を好まない。しかし、人が生きる意味を見つけて自分らしく生きられ、愛する人との死別の悲しみを癒すこともできるのならば、「生まれ変わり」を信じようとすることは意味のある選択だとする著者の考えには、深く共感できる。現に、この知識によって癒され、前向きに生きられるようになった人々の手紙が数多く紹介されている。むしろ、これは宗教ではない。しかし、一人一人が自分自身の内なる「信仰」を育てるために、核となるイメージを与えてくれるのではないか。

~~~~~

私流教師のゼン・コントロール 25

都立北園高校定時制 山崎茂雄

あこがれの美瑛にて

北園高校に赴任して二年生から持った担任学年が、持ち上がりで最終学年の四年となり、六月に修学旅行へ出かけた。北海道へ二泊三日の旅。

一クラス在籍三〇名のうち、参加者は一二名(男八、女四)。もう少し多くてもいいと思うが、全員参加が望めない定時制では、これだけでも、ますますの人数と言える。一二名の生徒に、引率は担任二人と校長。こぢんまりとしたグループ旅行の風情である。

旭川空港からはいつ、美瑛、旭川、札幌、小樽と回り、新千歳空港から帰京する。宿泊地は、旭川と小樽である。

前任校での修学旅行のほか、個人の旅行でも北海道は何度も訪れたが、美しいと評判の美瑛の風景は、まだ目のあたりにしたことがない。実は、作曲家の中村由利子(連載⑬参照)が、今回本棚に紹介したCD-ROM写真集のBGMをはじめ、美瑛をテーマにした曲をたくさん書いている。コンサートでも、私の好きな美瑛の風景をイメージして作った曲です。などと紹介される。それらの美しい旋律に身を委ねながら、まだ見ぬ美瑛への憧れは、いやまに募らざるを得ない。

旭川空港に降り立つと、雨の予報に反して雲間から青空が見え、陽光は明るかった。深山峠で昼食をとり、貸切バスで美瑛へと向かう。美瑛でのサイクリングが第一日目のメイン・イベントである。現地スタッフのガイドで、全員レンタサイクルにまたがり、出発した。

先導のスタッフといつよにぐんぐん先へ行く生徒もいれば、のんびりと走る生徒もいて、しんがりに校長ともう一人の担任(五〇代の女性)がつく。私は中ほどを走る。市街を抜けて橋を渡り、林を左右に見ながら舗装道路を走っていく。やがて、ゆるやかな登りくだりを過ぎると、一気に展望が開けた。

はるか彼方までつづく緑の丘。それがみごとなまでに美しいカーブを描き、ときたまアクセントのように、遠くに木が一本立っていたりする。大半はジャガイモ畑だと言うが、バジチワークの丘とも称されるとおり、くろきりと区分けされた形で緑の濃さが違い、きれいに耕された土のところもある。人が鋤を入れ、自然の地形と折り合ってきた末に生まれた、整然たる景観。私はしばしば自転車を停めて、シャッターを切り、あるいはつかのま我を忘れて眺め入った。空が無限に広い。入道雲が刻々と表情を変えていく。

そうこうするうちに、生徒たちはほとんど先へ行ってしまふ。それを挽回すべく全速力で先頭集団に追いつき、追い越し、彼らの走る姿も撮る。私のカメラの、それが本来の仕事である。しかし、停まつては追いつくそんなこ

とをくり返していると、生徒に笑われてしまふ。先生、生徒みたいと。

実際、私ははしゃいでいた。自転車の楽しみは、風を感じる事。すがすがしい風に全身で触れながら走っていくと、ため息の出るような景色が次々と展開していく。それは、似たような要素の組合せでありながら、無限の変化に富んでいる。自然は、一つと同じ姿を作らない。だから、魅力は尽きないのだ。

約一時間、一〇キロ余走つて、折り返し地点にたどり着いた。休憩所で小一時間の休憩とする。生徒たちは、ソフトクリームをなめたり、買い物をしたりして、思い思いにくつろぐ。

休憩所の向かいには、前田真三氏のギャラリー、拓真館があった。ソフトクリームをなめ終えた女生徒たちを連れて見学に入る。四季折々、さまざまな彩りに変化する美瑛の風景をめぐりに捉えた一枚一枚。CD-ROMで見慣れていた写真の現物が、色鮮やかに並んでいた。生徒たちは感嘆の声を上げ、あるいはことばを失つて見入る。私はなぜか、得意げな気分になる。中二階へ上がると、懐かしいピアノの旋律がふいに私を包んだ。至福を感じ、恍惚と立ち尽す。流れていたのは、言うまでもない、中村由利子の曲であった。

修学旅行と言え、教師はへとへとに消耗し、寿命も縮むのが常なのだろう。しかし、今回は何の懸念も事故もなく、生徒といつよになつて実に楽しく過ごした三日間であった。何だか、申しわけない気がしないでもない。

私流教師のモル・ミトロー ②⑥

都立北園高校定時制 山崎茂雄

ときめく思い

妻と離婚して、三年が経った。

離婚後しばらく悩み抜いて出した結論の通り、妻とは教ヶ月に一度、子どもを連れて会い、ときには三人で旅行もする。六歳になった息子は、物心ついたころからそうなることを、事実として自然に受けとめている。

しかし、男と女としての私と妻の関係は、この三年の間、さまざまに変化してきた。

ある時期は、私に話し相手を求めて、毎日のように電話をよすが、他に心を許せる相手があれば、ふつりと電話も鳴らない。

私の方は、Eメールや電話で気軽におしゃべりをし、ときどきいつしよに飲みに行ったりする女友達は三、四人いる。しかし、彼女たちとの距離は、みな同じように見える。いずれも三〇代の既婚者または離婚経験者だが、いつしよにいても、およそ危ういムードにはならない。それぞれに個性的な彼女たちの話を聞くのは楽しく、私はもっぱら聞き役に回る。私と話す、彼女たちはとても幸せそうだし、私も満足できることが多い。

実を言えば、そのうちのただ一人にだけは、私はずっと特別な思いを抱いていた。しかし、いくつかの理由から、私は、彼女との関係を

もう一步先へ進めることをしなかった。そんな状態で、もう一年半が過ぎていた。私の中には、先を進みたいと強く願う気持ちと、今のままがお互い幸せだと満足する気持ちとが相半ばしていた。実際、彼女は今のままで充分満ち足りているように見えた。けつきよく私は、進む運命ならそうなるし、そうならないものならそれもよし、と成りゆきに任せていたというのが、真実に近いかもしれない。

しかし、二学期になつて早々、彼女から来たEメールの中に、「私、失恋するかも知れない……」と、胸の苦しみを吐露することばが唐突に入っていた。私は一瞬、目を疑い、自分に対する思いの告白かと深読みを試みたが、そうでないとは認めざるを得なかった。

私は、長い間進むことをためらっていた自分の弱腰を激しく後悔した。彼女の胸を締めつけているのは、私ではない、他の誰かだ。その想像は、私の心にギリギリと爪を立てた。あまりのつらさに私は度を失い、私の気持ちに気づかずじつといた彼女を責めるようなメールを書き送った。

だが、彼女からの返信はない。してしまった行為を恥じる気持ちが、激しく私を苛んだ。そんな形でしか彼女への思いを伝えられなかった自分が情けなく、くやしくて、自己嫌悪と嫉妬に数日間、悶え苦しんだ。

しかし、まもなく都合をつけて会つてくれた彼女は、私の身勝手な仕打ちを責めることもなく、やさしく、誠実だった。私たちは、互

いの気持ちを率直に語り合い、今までのような関係を続けることが互いの望みなのだと確かめ合うことができた。

そういうわけで、二人の関係はまたふりだしに戻つたのだが、私の気持ちの方は、これをきっかけにブレーキが外れてしまった。

ふと気づくと、彼女のことを考えている。彼女のことを思うだけで、うきうきして笑いたくんだり、切なく胸が締めつけられたりする。あれこれ話したくて、毎晩でもメールを書きたくなる。たまに会う約束をすると、うれしくてもう朝から地に足がつかない。ハートはすつかり、「恋愛モード」に入ってしまった。

考えてみれば、私は、結婚以来、女性を見てすてきたと思い、心動かされることは数知れずあつても、妻以外の女性に恋を感じたことは一度もなかった。何とこれは、十数年ぶりに味わう感情なのである。

やはり彼女には、長年交際している恋人がいて、私の片思いは宿命つけられている。それはじゅうじゅう承知の上で、私はこの思いを抑えられない。いや、抑えたくない。今この恋は、私の生きるエネルギーそのものだから。

彼女の明るい笑顔を心に抱くだけで、自分も明るく元気になれる。彼女の働く姿や健気に生きる毎日を想像すると、自分もまたがんばる勇気が湧いてくる。

いつかは、あきらめねばならない。それはわかっている。でも、この恋が私をどこへ連れて行くのか、今はまだ、身を任せていたいのだ。

私流教師のモル・クトロル 27

都立北園高校定時制 山崎茂雄

心を癒す炎

一月中旬に、本校定時制の文化祭「北園祭」があった。日曜の午後半日で、各クラスが模擬店などを行なう。例年、校外の友人や近所の人、OBなどが集うので、規模が小さいわりにはほとほとのにぎわいである。

しかし、統廃合計画によつて本校定時制は今年度から募集停止となり、一年生がいない。規模が縮小し、盛り上がり欠けるのではないかと心配されていた。

それだけに、今年の生徒会役員たちは、これが最後の文化祭になるかもしれないとの思いで、熱心に取り組んだ。メインテーマを「終わりをければすべてよし」とぶち上げ、初の試みである後夜祭の企画を練り上げた。

例年なら、生徒は後かたづけをして、四時には帰つてしまう。それを、日没にかけてキャンプファイアーをやらうというのだ。参加は強制できないから、生徒が何人集まるか、生徒会役員たちも半信半疑だった。

しかし、ふたを開けてみると、黄昏の校庭に、三々五々集まつた生徒たちは、全校生徒100余名中、50名は優に超えていた。もともと欠席者が多いことを考えると、これは、驚異的な人数である。校庭の一角を広く使つての

クイズ。やがてキャンプファイアーを囲んでの歌。PTAのお母さんたちによる豚汁のサービス。そして、最後は花火。

炎は夜空に向けてごうごうと燃えあがり、ぱちぱちと薪がはせる。熱は頬を火照らせる。オレンジ色の光に浮かび上がった生徒たちの表情はみな、実に和やかで、楽しげだった。

その日のわがクラスの企画は、実はあまり後味がよくなかった。生徒の一人が校外でリーダーを務めるロックバンドを招いてのライブハウス。客の入りはまずまずで、評判は悪くなかったが、そのあと、クラスの生徒たちが黙々とあとかたづけしているそばで、バンドのメンバーたちは、我がもの顔で談笑している。私はよほど注意しようと思つたが、しよせんは他人のふんどしで相撲をとるようなことをした自分の責任だなあと思感したので、あえて黙つていた。しかし、生徒たちに不満がたまっているのはじゅうじゅう感じていた。あとかたづけが終わつた後に、私は彼らを周りに集めて労をねぎらい、申しわけないと謝つた。

そんな後味の悪さを残してクラス企画を終えたうちのクラスの生徒たちだったが、後夜祭が終わる頃には、晴れ晴れとした顔で、これですつかり気分が治つた。後夜祭に出てほんとうによかつた」と口をそろえて言つた。

まさに、「終わりをければすべてよし」。私は、こんなすてきな後夜祭を企画し、実現してくれた生徒会役員の生徒たちの努力に、心の底から、深い感謝を感じた。

わが人生最良の時

前任校都立大森高校で過ごした二二年間の最大の思い出は、やはり文化祭であつた。

体育館を会場として、三日間、定時制だけで各クラスがステージ発表を行なう。私が来る数年前、学校が荒れていた時代に、意欲ある先生たちが率先して始めた行事だという。

転任早々、そうした先輩たちが、クラスの文化祭は何をやる、職員劇は新人が中心だぞなどと焚きつける。私もその気になつて、担任の生徒たちが望むままに学園ドラマの脚本を書いて八ミリカメラを回し、同期の教員同士で職員劇『夕鶴』の舞台に取り組んだ。

無我夢中で迎えた本番の三日間は、実に楽しかつた。自分たちの出し物をやり遂げた充実感もさることながら、劇、音楽、映像とバラエティに富む各クラスの出し物は、目もみられない生徒たちの個性とエネルギーを発見し、目を見張らせるに充分なものだった。

中でも圧巻たつたのは、四年生の劇『三の商人』。ふだん無気力と反抗の表情しか見せないような生徒が、シャイロックをみごとに演じていた。舞台装置や衣装も凝つていて、みんなの協力でできあがつているのがわかる。何よりもすばらしいのは、それが、四年間やりつづけられれば、これだけのことができるという、生きた証拠になつていることだった。

以来私は、文化祭にとり憑かれてしまった。転任当初から担任したクラスは、四年間、映画を撮りつづけた。ビデオではない。現像に

私流教師のメン・コントロール

都立北園高校定時制 山崎茂雄

古い自分を越えていく力

現在私が住んでいるのは、埼玉県入間郡大井町というところで、池袋から東武東上線で川越の手前になる。地理的には所沢や狭山にも近く、少し車を走らせれば、たちまち、鬱蒼とした林やのどかな田園風景が広がる。最近購入したばかりのカローラ・スパシオという、ふくらみのある流線型ボディが銀色に輝く愛車を駆つて、そのあたりを走り回るのが、近ごろの楽しみである。

新しいのは、車ばかりではない。実は運転免許自体、この二月に取得したばかりだ。

私は、鉄道や自転車に愛着が強く、環境への問題意識などからも、車社会というものにずっと疑問を持ちつづけてきた。とりわけ、日常化した交通事故の悲惨さと理不尽さに、強い嫌悪感があった(本欄参照)。免許を取らないことが、車に依存しすぎた社会への批判の態度表明であると思つてた。

しかし、それが長年続くと、自分が圧倒的少数派であることから、むしろコンプレックスの裏返しとして、自説に固執する、という頑なな態度になってきていた面がある。

おりしも一年ほど前に、親友たちが相次いで新車を購入し、車の話で盛りあがった。話の埒外に置かれていた私も、車に乗ることをさ

んざん勧められた。世界が広がるからと言われ、一時はその気になって、夏休みには教習所に通おうと考えていた。しかし、ほとぼりが冷めるとまたおっくうになってしまい、それを正当化するために、やっぱり、自分は車社会には反対だ」と、再び自説の殻に閉じこもる、という状態に陥つてた。

ちよつとそのころのことである。私が十数年ぶりに、むきめく思いこの虜になってしまったのは(連載26参照)。

その思いは、いろいろな面で私に勇氣とエネルギーを与えてくれたのだが、とくにその時期、自分にとっては大きな転換となる決断を二つ、苦もなくしてしまうことができた。

一つは、全日制への異動希望を出したこと。

定時制の統廃合計画に入っている本校は、平成一二年度から生徒募集がなくなり、順次学年が減つて行く。そのため、教員数も削減され、誰かが出なければならない。その異動に、私は自ら志願した。

北園高校にはまだ三年目だが、赴任早々二年から担任したクラスが、これで卒業となる。もう一年いれば、担任のない悠々自適な状態でゆつくり研究もできるし、新採以来初めて全日制高校に転任するための心の準備もできる。前はそう考えていたのだが、見方を変えれば、もう一年残つても、自分のためには楽だが、大した仕事ができるわけでもない。

それよりも、ここでの自分の使命は終わつたときっぱり見極めて、新しい学校で新しい課題に積極的にチャレンジしたい。とくに今度こそ全日制で……、という気持ちになれた。

そして、もう一つの決断が、車の免許を取るべく教習所に通い始めたことなのである。

これといった考えはなかったのだが、むきめく思いからバイになっている心理状態の中、全日制に異動するともう教習所に通う暇はなくなる、というせつば詰まつた状況に後押しされて、いつの間にかヘッドルを越え、半ば衝動的に教習所の手続きをしてみました。

通い始めてみると、これがおもしろくて、楽しい、楽しい」と彼女にメールで教習日記を書き送つた。ベテラン・ドライバーである彼女は、昔、教習所で味わつた苦勞のあれこれを昨日のことのように書いて、励ましてくれた。ますますやる気が出て、車を買う気にもすぐなつてしまった。

そんなふうで、彼女の思いが源泉となつて、古い自分を乗り越えて行こうとする不思議な衝動を、美感じ続けた日々だつた。

しかし、私の思いが成就する運命にないことは、前にも書いた通りである。ほぼ三ヶ月間、彼女と頻繁にメールのやり取りをしながら淡い夢を見つづけた後で、私はもう一度、彼女と本音で話し合う機会を持つた。

彼女の態度は一貫していた。私に思わせぶりをするのは一切なく、自分の心が別の人にあることを明言した上で、私の思いを誠実に受けとめて、私との間の友情をいかに大切に思つているかを話してくれた。二人はこのうえなく打ち解けて、何もかも語り合つた。

そんな彼女の感謝を込めて、私は、自分の思いに決着をつけることを約束した。今はそれが、いかに困難に思えようとも。

運転のセルフ・コントロール

四〇過ぎて運転免許を取るのは、ぶつう、苦労すると言われる。私自身も、大幅な教習時間オーバーは覚悟の上だった。

しかし、考えてみれば、私は学習心理学を専門とする研究者の端くれで、イメージ・トレーニングの実践家ではないか。イメージを活用すれば、運転技能の修得は、より容易になるはずだ。

車の運転では、周囲の交通状況をすばやく認知し、判断して、適切な操作をしなければならぬ。しかし、他の車や歩行者との関係は刻々と変わる。その中でいくつもの認知行動を並行・連続してやらねばならない状況は、初心者には情報処理の負荷が大き過ぎる。頭ではわかっていても、いざその場になると、焦ってしまって、何かがおろそかになる。

私は、走行コースをイメージの中でたどりながら、要所に来ると、ゆつくり時間をかけて注意ポイントを確かめ、必要な操作をする、という手順を心の中でくり返した。

すると、確かに焦りはなくなる。前にもくり返しやつたじやないか、大丈夫、という気がして、余裕を持って判断し、操作できる。

とはいえ、実際には、連日の教習スケジュールをこなすことに追われて、そうそう深いイメージが体験できたわけではない。

それでも、リラックス効果は抜群だった。教習中とはかく、ハンドルを持つ手に力が入り

すぎて、手に汗握るとか、肩が凝るという話をよく聞く。初めは私も、力を抜いてと指摘を受けたが、「ウデガオモイ」と唱えれば、腕と肩はだらんと重くなる。握っている掌を開けば、腕がハンドルからずり落ちるほどだ。やがて条件反射で、ハンドルを握ると、心も体も自然とリラックスする感覚になった。

こうした方法論を活用して、規定時間内で教習を終えてやろう。初めはそう目標を立てたが、実際に仮免に落ちて時間オーバーを重ねてみると、一時間ごとにやればやるほど操作に慣れ、楽に運転できるようになるのが実感できた。やはり学習の基本は反復練習だから、時間数にこだわるよりも、自分の納得いくまで練習をくり返す方がよい。

そう悟って取り組んだら、仮免後の第二段

~~~~~ 瞑想の本棚から

▶ 佐藤光房 還された親たち (I-VI) あすなろ社 各三三九円 ◀

不条理な交通事故にわが子を奪われた親たち取材した、朝日新聞夕刊連載のシリーズ。身も凍る思いのする生々しい事故のありさま、地獄のような遺族の苦しみとやり場のない怒り、そして遺族の心に残る懐かしい故人の面影を、鎮魂の思いを込めて丹念に描き出していく。

朝日新聞編集委員だった著者自身、結婚式を三日後に控えた最愛の娘を、暴走トラックの事故で亡くした。新聞に書かなかったその悲痛の体験記は、第一集の巻末に収められている。

個別の悲劇を見つめることを連して、次第に、交通事故をめぐる行政や司法のあり方、ひいては車の危険に鈍感になりすぎた世の中への疑問が膨らんでくる。やがて、全国交通事故遺族の会を作り、集い、悲しみを分かち合いつつ、連帯して社会に問題提起していく遺族たちの姿に、愛するものの死を無駄にすまいと煩悶の努力を続ける人々の、癒されぬ思いを見る。

ハンドルを握る者が直視しておかなければならない事実の数々が、ここには書かれている。

階はむしろトントンの拍子に進み、正味二カ月足らずで、免許が取れてしまった。

ハンドルを握っていて、当初予想したような恐怖感はほとんどない。それどころか運転すること自体が楽しくてならず、暇さえあれば愛車を転がしている。

見通しのいい道路で、風の中を軽快に走る。ふと気づくと、とても不思議な気分。自分は一生、車の運転などしない。つい最近まで、そう信じていたのに……。だが、自分で作り上げていた頑なな心の壁を乗り越えようと、確かに、思いもかけない新たな地平が開けた。私はこのことを、ずっと忘れないようにしよう。

むしろ、今回の免許取得で、車社会への疑問が消えたわけではない。安全運転を実践する中で、考えつづけたいと思っている。

~~~~~

# 私流教師のモラル・コントロール 29

東京都立豊島高校 山崎茂雄

## 心の母校に帰る

二五歳で高校教員になってから一八年間、定時制ばかり三つの高校を経験してきたが、この四月の異動で、初めての全日制高校勤務となった。

異動先の豊島高校は、学力レベルで言えば中の上、しかも、まじめでおとなしい生徒が多い。授業は出るもの、教師の話は聞くものという姿勢がきている。当たり前かもしれないが、その当たり前前かがもしい世界に長年いたので、そのことがうれしくてならず、当たり前前かごに日々感謝して、思いつき授業をやっている。

そんなふうで、新しい環境に飛びこむ不安も、三年前に北園に異動したときほどに私を悩ますものではなくて済んだ。

豊島高校は、池袋から地下鉄で二駅、豊島区、板橋区、練馬区が境を接するところにある。実は、そのあたりは、私が生まれ育った故郷であり、生徒の中には、小中学校の後輩もいる。出身高校の都立板橋高校も、歩いて十分足らずの至近にあり、豊島高校とは、昔から姉妹高のように親しい。

街を久々に歩いてみると、大きく変わったところもあるが、そこかしこに昔の面影を見

つけてハッとし、心は時をさかのぼっていく。

思い浮かぶのは、中学、高校時代の自分の姿である。ともすると膨れ上がり過ぎる自意識をもってあまして、よく一人で散歩をした。とくに、学校が建ち並ぶ豊島高校の周辺は、休日や早朝には人通りが少なく、あてもなく歩きながら、自分と向き合う時間を持つには、格好の場所だった。思えば、小説を書き始めたのも、自律訓練法と出会ったのも、その時期であった。

実際に高校生活を送った母校よりも、豊島高校と言えは、青春の悩みと憧れが、より純粋で透明な記憶としてよみがえる。

そのせいか、制服を着て教室を埋める四〇名の生徒たちの中に、かつての自分と同種のものを見てしまう。だから、ありのままの自分を出して、自分はこう生きてきたよと語りたくなる。ときには、恋愛の話さえも。

定時制の生徒たちを私は大好きだが、高校時代の自分とは重ならない。かつての自分とは異なる経験をし、異なる青春をきている。その意味で尊敬し、彼らのために自分ができるところを精いっぱいにつけてきた。でも、授業の中でこれほどまで自分をさらけ出すことはなかったなど、今にして思う。

そうして夢中で授業をやっているうちに、いつしか一学期も半ばを過ぎた。中間テストで書いてもらった生徒の感想を読むと、自分のことをよく語る、雑談のおもしろい先生として好感を持って受けとめられていることは確

かなようだ。二年生の古典では、身近な例でよく理解でき、古典が嫌いでなくなったとの感想が多い。しかし、三年生の現代文になると、教材内容の問題もあつて、初めはどんなおもしろい授業になるかと楽しみだったが、教科内容に入ったら期待はずれだったと、辛辣な批評もある。

なるほど、生徒たちは、授業中静かにしているというだけのしつけはできている。しかし、その陰には、授業内容が魅力的であるかどうか、シリアに見分ける眼が光っている。

正直なところ、小人数の定時制で長年個人指導的な授業をしてきた私の講義技術は、基本的なところで未熟さを否認ない。声は通らないし、板書は未整理で字も下手だ。作品の背景を教養豊かに語るだけの知識もない。

自信があるのは、生徒一人一人が感じ、考えるところを出発点に、授業を作り上げていく、定時制で実践しつづけてきたその姿勢だけだ。今はまだ不十分だが、その目標を四〇人の授業の中で求めつづけた。そのために工夫し努力することは、やはり私の生きがいの大きな部分を占めている。

授業技術にしても、授業前の発声練習(↓連載⑥参照)を朝の日課として続けるうちに、自然と声が通るようになってきた。

倍増した日々の仕事量の中で、泥縄式の授業計画にならざるを得ないときもあるが、確かな手応えを感じながら、試行錯誤を楽しむ毎日を送っている。



# 私流教師のモル・ミトロー

東京都立豊島高校 山崎茂雄

## 歌うことの楽しみ

歌う、と言えば、中学時代の歌唱テストを思い出す。ピアノを弾く女性教員の横に一人立つて、みんなの視線を感じながら、足はがたがた震えていた。音程に自信がなかった。

高校の芸術選択で音楽を選んだのは、美術で下手な絵が形に残るよりはましという、消去法による選択に過ぎない。それでも、その当時流行っていたフォークソングを歌うために、小遣いを貯めて安物のギターを買ったこともある。当時、ひとり自宅で歌うのは楽しかったが、人前で歌ったことはない。教室で、ギターを囲んで歌う仲間の輪に入って、声を合わせるくらいが精一杯だった。歌うことを楽しんでいたのは、その時期くらいだろうか。

大学に入ったころから、カラオケが急速に普及した。スナックといえばカラオケだったし、学生コンパの会場にも、たいていカラオケ機があった。当時は、どちらかというと、中年サラリーマンのストレス解消法という印象で、学生同士で歌うことは少なかったが、アルバイト先では歌わされる機会があった。しかたなく一曲歌うが、その貧相さにまわりも困惑して、次からは敢えて二指名はかからなくなる。

それは、就職してからも同じだった。カラオ

ケ嫌いを公言して、なるべく辞退する。飲み会は大好きなので、喜んで出かけるが、カラオケがあると、とたんに場が苦痛になる。たいていの人は、マイクが回ってくればそつなくこなせる持ち歌を二曲や三曲は持っている。それが、私にはうらやましくてならなかった。

そんな苦手意識をなんとか克服したいと思ったのは、四年前、休職派遣で一年間の大学院研修に行けると決まったときである。大学院では、年下の学生たちとも対等につき合って行きたい。カラオケボックスの普及で彼らの世代にとつてカラオケは、日常的なコミュニケーションの手段である。カラオケ嫌いで自分から壁を作ることは、できれば避けたかった。

そこで私が考えたのは、二人でカラオケボックスに行つて練習するという方法である。大学近くのカラオケボックスの会員になって、春休み中から何度か出かけた。学生街とはいえ、屋はカラオケの客は少なく、広い個室で思う存分練習ができた。

わが青春のフォークソングは妙に手垢がつき過ぎて歌う気にならず、昔聴いていいと思つた日本のポップスを中心に、同じ曲を何度も歌つてみた。声を出す練習だから、初めはマイクを使わずに地声で歌つてみる。音が外れてもかまわない。くり返しやっていると、次第に音程が外れず歌えるようになるから不思議だ。歌えるともた楽しくて、一人でも一時間一時間はあつという間に過ぎてしまう。

一、二回通つたら、研究室の歓迎会があ

つた。案の定、二次会はカラオケにくり出した。若い講師や院生に混じつて歌い、生まれて初めて、カラオケの会を楽しんだ。

一度楽しさを覚えると、あとは病みつきになる。歌の巧拙はさておき、声を出せば気持ちがいいから、誘いを断るどころか、自分から率先して人をカラオケに誘うようになった。

人が歌っているのを聴いていいと思つた曲は、歌手と題名を憶えておいて、レンタルCDを借りて聴く。くり返し聴いては歌つてみて、何度も試行錯誤しているうちに、自然に乗れるようになってくる。歌というものは、自分が歌うつもりで聴いてみると、それまで意識しなかつた細部の微妙な節回しや歌詞の意味にも気がつく。それがまたおもしろい。

一度覚えた曲は、くり返し歌っているとやがて飽きてきて、また新しい曲を憶えなくなる。飽きるまで歌い込んだ曲は、しばらく歌わなくても、いつでもまたそつなく歌える持ち歌になる。そうして、昔の曲から最近の曲までずいぶんレパートリーが増えた。

カラオケ好きの同僚と出かけて、二人で三時間以上歌つても、一向にネタは尽きない。周りには、特定の好きな歌手の曲を中心に歌う人が多いが、私は曲で選ぶので、結果としていろいろな歌手の曲を幅広く歌っている。

何でもつと早くこの楽しみに気がなかつたかと思うほどであるが、やはり件のごとく、何ごとも機の熟す時があり、あとから苦勞して見つけた楽しみはまた、格別なのである。

